Case 3

14カ国にルーツをもつ生徒たちが集い 毎日が留学のように異文化を体感する

飯野高校（三重・県立）

三重県内の外国籍高校生が集まってくる飯野高校

飯野高校の全日制は、応用デザイン科と英語コミュニケーション科からなる。1999年に英語科から改編した英語コミュニケーション科は、当初は日本人生徒が英語を専門的に学ぶ科であった。しかし、三重県内の外国人居住者の増加にともない、同校で外国籍の生徒を積極的に受け入れるようになり、県内の各地から南米やアジアを中心とする外国籍の生徒が集まり始め、2008年に外国人生徒等教育のための加配教員が配置されるようになった。

同校では外国人生徒等をCLD生徒(Culturally Linguistically Diverse=文化的言語的に多様な背景をもつ生徒)と呼んでいる。CLD生徒の多くが英語コミュニケーション科に在籍。英語コミュニケーション科では日本人生徒を含め14カ国にルーツをもつ多国籍の生徒が日々共に学んでいるのだ。

「日本語がまったくわからないCLD生徒もいるため、『お互いを助け合おう』と生徒たちにはいつも話しています。特に日本人の生徒には、日本語で話すときは易しい言葉を使うようお願いしています」(英語コミュニケーション科主任・粂内直美先生)

CLD生徒たちのために、外国人生徒支援専門員が常勤し、スペイン語とポルトガル語で授業サポートや通訳補助を行っている。また学校設定教科「国際」のなかに学校設定科目「日本語基礎A」などを設置。日本語で教科学習が困難な生徒には、国語、社会、理科、保健の取り出し授業も実施している。

「違っていて当たり前」で生徒みんなの居場所ができる

日本人の生徒にとって英語コミュニケーション科のクラスは「毎日が留学状態」と、粂内先生は語る。「〝異文化〟〝多文化〟と言うまでもなく〝違うことが当たり前〟。国籍だとか何語を話すかは重要ではなく、個人としてお互いを見ています」(粂内先生)

母語が異なるため、最初は身振り手振りが中心だが、生徒たちは自然と助け合ってさまざまな言語を交えながらクラスメートとコミュニケーションをとっていく。

「日本人の生徒はわからないと先に進めない子が多いのですが、CLDの生徒たちはわからないことを恥ずかしがらずに隠さず伝えてきます。その姿を見て日本人の生徒たちが『わからないと言っていいんだ』と気づき、ありのままの自分を出せるようになっていきます」(丸山竜司教頭)

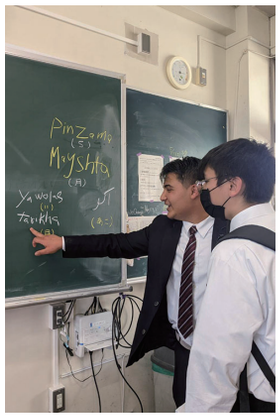
お互いのありのままを受け入れる環境に、多くの生徒が居心地の良さを感じるようになる。中学まで不登校だった生徒が自分の居場所を見つけて毎日登校するようになったり、入学当初はCLD生徒と馴染めなかった日本人生徒が、「違う」ことを気にしなくなり、サポートする側に変わっていったりもする。

CLD生徒たちに影響を受けるのは日本人生徒だけではない。教員も変わっていくという。

「日本語も英語も理解できない生徒にどう伝えていいか迷ったときに、以前は『教員だからわからないとは言えない』と思っていました。でも生徒たちを見て正直に言ってもいいと思えるようになり、『先生もわからないから』と、ネイティブの生徒に頼るなど、生徒たちとフラットに学び合えるようになりました。本校の教員は上から引っ張るのでなく、身近にいる大人の一人として生徒に接しています」(英語科・橋谷優希先生)

英語科の先生だけでなく、数学科の先生が、ポルトガル語の数字の読み方を覚えるなど、工夫しながら生徒たちと寄り添う方法を模索し、自身を変える努力をする。教員が変わることで、授業中に下を向いていた生徒たちが顔を上げるようになっていく。

「顔を上げさせたら教員の勝ちなんで



（写真左）さまざまなルーツをもつCLDの生徒たちと日本人の生徒たちが、"普通に"混ざり合い、オープンに学び合っている。（写真下）お互いの母語を教え合うことが日常茶飯事。楽しみながら複数の言語が身についていく。

写真左から、今高成則校長、英語コミュニケーション科主任・粂内直美先生、英語科・橋谷優希先生、丸山竜司教頭

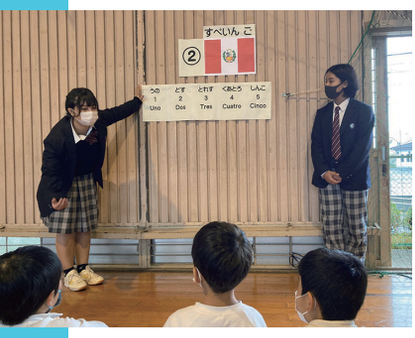
す。そこから授業はスムーズになります」（丸山教頭）

英語で自分の考えをスピーチできる力をつける

英語コミュニケーション科では①英検2級・準1級以上を取得する、②英語を使って行動、スピーチ、プレゼンテーションができる、③卒業してからも、自ら英語学習ができる、の3つを目標とし、さまざまな専門科目の授業を実施している。英語の基礎を学ぶ総合英語、英語で自己表現をするエッセイライティング、ニュースや新聞記事などを理解し論点整理するアドバンストライティング、ディベート・ディスカッションなどの授業を経て、4技能をバランスよく身につける。3年生の英語表現演習では、全員が自分で見つけたテーマについて英文で書き、プレゼンテーション型スピーチと説得型スピーチの発表を行う。そこで代表となった生徒は市民会館のホールで発表を行うことが科のゴールだ。

英語関連の行事も豊富で、ALTと英語でコミュニケーション活動をしたり、プレゼンテーションを学ぶサマーセミナーや、英語のスペシャリストによる講演やワークショップなどを実施。校外のスピーチコンテストに参加し高い実績をあげる生徒も多い。

「飯野リトルワールド」と称し、チーム分けしたグループに属する生徒たちの母語で、1つの単語を表現して発表。



飯野高校の特徴を知ってもらう地域活動として、近隣の小学校でさまざまな言語の出張授業を行っている。

多言語を駆使できる人材の存在を社会に広めていきたい

日本人の生徒の多くが卒業後に大学や専門学校に進学、あるいは正社員として就職することに対し、CLDの生徒たちは進路が不安定な傾向にある。高い英語力があっても進学先で日本語での授業についていくことが難しいことや、働くことに対する考え方の違いから非正規雇用を希望する生徒も少なくない。その結果、本人の希望とは別に帰国する卒業生もいる。一方で、母語・日本語・英語の3カ国語が使え、ワールドワイドなパイプ役として即戦力となる人材としての期待が地域社会に知られていない課題がある。

「CLDの生徒たちが長く日本で暮らせるために、地域の企業に生徒たちの存在や能力を知ってもらえれば進路選択の幅がもっと広がります。そのために、生徒と地域社会の人が交流できる場を一層増やしていかなければならないと考えています。そして生徒たちには、学校で養った垣根のない感覚を活かし、インクルーシブな社会を実現していける人材になってほしいと願っています」（粂内先生）

市民会館のホールでの英語表現演習発表会。英語コミュニケーション科の代表が、全校生徒の前でスピーチを行う。

＼ Students' Voice ／

2年生
ウィハラ エリケーワラさん

英語を身につけて、イギリスの大学で獣医学を学びたい

父の仕事の関係で2年前にスリランカから来ました。日本はクリーンで人々が礼儀正しくて大好きです。日本に来たときは日本語がまったく話せずコミュニケーションをとるのが大変でしたが、飯野高校では日本語と英語が学べて、さまざまな国から来た友達がいるので、いろいろな言葉で話せるのが楽しいです。先生たちがとても親切で、困ったときにいつも助けてくれるので学びやすい学校です。

自分にとっては日本語も英語も外国語。日本語は覚えなければならない文字が多く、漢字が難しいので英語の方が得意。将来は獣医になりたいので、生物学や獣医学を学べる大学に進学したいです。でも、日本語での受験は難しいので、英語の勉強をがんばって、イギリスの大学を目指しています。

1年生
吉川 心さん

自分と考え方の違う人を理解できる人間になりたい

英語コミュニケーション科を目指したのは、『VOGUE』というアメリカの雑誌が好きで、海外で活躍する編集者になりたいと思ったからです。『VOGUE』はファッションだけでなく、LGBTQをはじめ、多様な考え方の人についてとりあげているのが魅力。私は自分とは違う考え方の人を理解できる人間になりたいと思っているからです。本校にはいろいろな国のルーツをもつ友達がいるので、とてもいい環境です。多国籍の言葉を話すクラスメートと一緒に学び、知らなかった文化にも触れられて、毎日が楽しいです。「自分から英語で話してみよう」と、日々挑戦することの繰り返しで、1つできるようになるとまた次の目標が出てきます。挑戦の繰り返しを体験することで、将来の夢もよりはっきりしてきた気がします。

学校データ
1974年創立／応用デザイン科・英語コミュニケーション科／生徒数457名（男子107名、女子350名）、1987年に設置された英語科を1999年に英語コミュニケーション科に改編。海外にルーツのある生徒を多数受け入れている。